

災害にどう備えるか—私の提言—

- 災害にあっても、立ち直れるだけのパワーを持った街づくり。
- 若者が住みたくなるような街づくり。
- 高齢者が、可能な限り、地域のコミュニティーで生活できる街づくり。
- さまざまなネットワークを、「災害時の運用」という観点で、再編成しておくこと。
- **小中学生への災害教育、訓練の重要性**

最後の一悲劇と奇跡の教訓を学ぶ

108人中70名死亡、4名行方不明 3000名で、ほとんど死者なし



大川小学校の悲劇！！

- 海岸から4kmの大川小学校まで、津波がくるとは想定されていない。
- 学校に屋上は作られていない。
- 小学校の校庭が、地区の一次避難場所。
- 二次避難場所は決めてなかった。
- 裏山は、「急斜面で、倒木や雪があって、登れない」ということで、避難先に選ばれなかった。

釜石の奇跡！！

3月11日午後2時46分、マグニチュード9の巨大地震による激しい揺れで、岩手県の釜石市立釜石東中学校の校内放送は停止したため、「逃げろ」という先生たちの指示は伝わりませんでした。

ただならぬ激しい揺れが収まると、「津波が来るぞ」と大声を上げながら最初に走り出したのは、部活動などでグラウンドに出ていた生徒たちだったそうです。

先頭切って駆けだした生徒たちを追うようにして、校内にいた生徒たちも避難場所に指定されていた高台のグループホームを目指して走り出しました。

隣接する鶉住居(うのすまい)小学校の児童たちも、校舎の中にとどまってはいませんでした。これまで何度も合同避難訓練に取り組んできた中学生たちが高台を目指す姿を見て、校舎を飛び出してその後を追ったのです。

当初の指定避難場所のグループホームに到着後、裏の崖が崩れるのを見て、さらに500mの高台の介護福祉施設まで避難。その直後、グループホームは津波に飲み込まれました。

釜石市内では約3000人の小中学生のほとんどが押し寄せる巨大津波から逃れて無事でした。

釜石の奇跡が意味するもの！

- 平成17年スマトラ島の津波被害の調査から、これが日本でおきたら大変なことになると、片田教授は思った。
- 小学生、中学生に教育することが大切。
- 釜石市教委とともに、防災教育に取り組む。
- 避難三原則
 - 1) 想定にとらわれない
 - 2) 状況下において最善をつくす
 - 3) 率先避難者になる

雄勝中学校—復興輪太鼓
たくましく 生きよ！！



医師・看護師以外で、初めての救命
5月10日 中国新聞



作成・編集 「いそがし」
出演協力 雄勝水浜のみなさん



おまけ

大川小学校と釜石

大川小学校を襲った津波は山裾まで



指定避難所からさらに高台へ



片田教授の元々の専門は土木工学。防災教育と本格的に向き合うきっかけとなったのは、2004年のインド洋津波の被災地調査に参加した時に目の当たりにした光景だったそうです。犠牲者約23万人という数字だけでは表すことができない惨禍に戦慄し、思ったそうです。「日本で起きると、大変なことになる」。そして、「子どもたちを決して死なせてはならない」という片田教授と先生たちの思いが、子どもたちの頑張りにつながり、「奇跡」を起こしたのです。

生き埋めの人をどう救うの

こうした時、頼りになるのは誰でしょう。

- 大災害時、消防隊や警察や自衛隊が、すぐに助けにきてくれるわけではない。
- 生き埋めになった人や閉じ込められた人は、自分達で救わないといけない。
- 私の場合、このアパートの1階の住人が生き埋めになりました。よびかけると、下から声が聞こえてきました。
- 声が聞こえて来たら、助けるしかないですね。
→心肺蘇生については、誰でもできるように

自分達しかいない→大声で近くの人を呼ぶ

- 大声で、「人が生き埋めになっている。助け出すのに、道具がいります。日曜大工道具を持ってきてください」と助けを呼んだ。
- すぐに、近くの人が2セットの大工道具をもってきてくれた。
- 頼りになるのは、日頃からの近所付き合いです。最低、朝会ったら、あいさつ位はしましょう。

救命活動で、リスク管理は大切

- すぐに、畳を剥いで、2階の床板に、金槌と鋸で、人が通れる穴をあけた。
- 両隣の建物は、余震でいつ倒れてきてもおかしくないように思えました。
- このよう状況の中で
一体、誰が、危険を冒して、その穴に入るのでしょうか。

冷静な状況判断と、「やるしかない」という決断

- 周囲に火事が近づいていないか。→1、2時間は大丈夫そう。
- 両隣の半壊の家屋が、余震でこちらに倒壊してきて、生き埋めになった時、周りの人は助けてくれそうか。→多分、見捨てはしないだろう。
- 医療を志している学生なのだから、「やるしかないだろう」という「**見栄と使命感**」

経済状況が被災に影響

- 留学生が多く亡くなった。理由は安い家賃のアパートに住んでいたから。
- 私は、25000円のアパートに住んでいたが、1月から30000円に値上げされたので、それで「助かった」のかもしれない。
- 仮設住宅でも最後まで残ったのは、行き場のない人。→**高齢者、一人暮らし、障害者等の「弱者」**については、**初期段階から将来を見据えて、対応が必要。**

ボランティア活動の教訓②

- 私は、学年の教務委員をしていましたので、ボランティア活動の窓口になりました。
- まず、連絡のネット網を構築しました。
- 大学、学部との間で、hot lineを構築。
- **すぐに相談でき、決定し、実行できるシステムを作りました。**
- 被災後数日後、病院職員の披露がピークになった時、担当教授から、「救急要請」→「明日50名の学生を集めて」→80名結集。

ボランティア活動の教訓③

- その状況で、何が必要で、何が不要なのかを、「指示待ち」ではなく、自己責任で判断し、実行していくこと。
→例えば、近くの避難所をまわり、医療支援のチームと連絡をとり、血液の検体の搬送と結果の伝達などもした。また、市を動かして、レントゲン車での避難所の住人のレントゲンを撮影することを実現した。

被災した直後に、一番重要であったものは。

- メガネ、靴、お金。

メガネがないと見えません。→メガネは複数もっておくこと。分散して置いておく。

靴がないとガレキの中を歩けません。一番頼りになるのは、足です。

災害時は、カードは使えません。非常用の**現金**も必要と思います。小銭も準備しておこう。

→普段から、何が**必要か**、どこに**しまっておくか**を、考えておくこと。

でも、ここには素晴らしいコミュニティがありました。

・元保育所であった避難所は、きちんと整理され、支援物資も整理されていました。

・救護室が準備されており、雄勝病院で被災された看護師が泊まり込みで対応されていました。

・**全避難者の名前**がノートに記載され、内服薬、疾患名等が整理され、身体状況も記載されていました。

「弁当が余ってお困りのようなので、人助けと思って、いただきましょう」

「われわれも、困っていることがあります。広島のみみじ饅頭が余っています。明日届けますので、是非食べてください」

→直感的に、ここに**関わりたい**と思いました。

太平洋のような大きな心持ちで



がんばってください

